

《研究ノート》

石川三四郎の道徳観

——愛国心に関する論考の検討を中心に——

貞清 裕介 廣嶋 龍太郎

■ アブストラクト

本稿は、石川三四郎の道徳観を論じるために愛国心に焦点を当てたものである。石川は、近代日本の国民性の要点を押さえ、その上で愛国心の問題点を指摘している。石川の考える愛国心の特徴として、日露戦争期から世界的な視野を持って他国との衝突によって愛国心を強化するものではないとしていた点、もう一つは国家が愛国心を扇動し野心を駆り立てるのではなく、個人の自由を認め道徳の責任を負わせ、そこで愛国心や友愛の精神を発達させることを示した点を明らかにした。

■ キーワード

石川三四郎・愛国心・道徳

■ key word

Ishikawa Sanshiro・patriotism・moral

はじめに

本稿では、石川三四郎(1876-1956)の道徳観における愛国心の概念を明らかにするために、彼の論考を検討していく。石川は明治期から昭和期に社会主義者、無政府主義者として活躍した人物である。他には日露戦争や第二次世界大戦で非戦論を展開するなど、平和主義者の面も評価されている¹⁾。大澤正道が「石川の生涯は平和主義から始まった」²⁾と論じるように、石川は平和に関する論考も数多く発表している。その石川の平和に関する論考を収集したものに唐沢柳三が編集した『わが非戦論史』がある。また、石川の『ディナミック』³⁾の平和主義に関する論考を収集した家永三郎が編集した『横田喜三郎 石川三四郎 無産政党・労働者の反戦運動資料』がある。このように、石川は平和主義者であったという点は言い切ってよいであろう。

その石川が非戦論を展開する上で、「愛国心の問題は日露戦争の時以来、石川が好んで取り上げてきた」⁴⁾と大澤が指摘している。また、拙稿の「『小学教師に告ぐ』から見る石川三四郎の小学校教師観」でも石川の非戦論では愛国心について取り上げていることは指摘している。これらを通し

て、石川の道德観を明らかにするうえで、愛国心が重要な位置を占めていると考えられる。しかしながら、石川の道德観や愛国心を主題とした研究は散見した限り見当たらない。そこで本稿は、近代日本の愛国心の系譜をまとめ、その上で、石川の愛国心がどのような特徴を持っていたか明らかにしていきたい。

本稿の主題の近接領域として社会主義者の愛国心を研究したものに藤原修の「近代日本における平和主義と愛国心 -- 幸徳秋水と福沢諭吉」が挙げられる。幸徳秋水は石川と同じく初期社会主義者として有名である。その幸徳の愛国心批判として、「1) 愛国心は、他国への憎悪の反射として形成されるものであるが、2) 決して同胞愛を伴うものでなく、むしろ同胞への侮蔑・暴力につながる。3) にもかかわらず、これが国民の熱狂の対象となるのは、迷信、虚栄、野蛮的獸性による。あるいは、国内における野獣に近い劣悪な生活状態の帰結ないし代償である」⁵⁾と論じられている。本稿の結論の先取りになるが、幸徳と石川それぞれの愛国心批判は、他国との衝突によって形成、強化されていく点、愛国心が野心として利用されている点をそれぞれ指摘している点が類似していると言えるだろう。

1、愛国心の系譜

本節では、明治維新後から第二次世界大戦終結までの、愛国心の系譜をまとめていきたい。先行研究を検討すると、近代日本における愛国心の系譜として、主に三つの系統に分類できる。そこで、本稿では坂口茂の愛国心の系譜の三分類を援用してまとめていく。まず、坂口は愛国心の系譜を(1)「尊王愛国」、(2)「忠君愛国」、(3)「滅私奉公」の三つの系統に分類している⁶⁾。

「尊王愛国」が主流だった時期は、明治維新以後から1890(明治23)年の「教育に関する勅語」(以下、教育勅語)が公布されるまでである⁷⁾。この時期の特徴として坂口は、「我が国では思想的混乱の時期であり、教育勅語の公布(明治二十三年十月三十日)によって、教育界では一応の主義方針を与えられたが、一般国民の間ではかかる主義方針は無関係、無関心に近かった。それ故にこそ、国家主義教育の必要性が強調された」⁸⁾と論じている。教育勅語の公布は、教育界には国家主義教育の方針を与えたが、未だ国民の間には愛国心の浸透には至っていないことがこの時期の特徴と言えるだろう。

しかし、日清戦争、日露戦争という二つの戦争の対外関係によって、日本の愛国心の育成や強化に繋がっていく。坂口によると「忠君愛国」が高揚する背景として、「従来の尊王愛国なり単なる愛国心(純粋な意味での愛国心)は、その性格を変容することになる。そして、浮上してきたのが維新以来、一部国粹主義、日本主義の立場を強調する人々が高揚した「忠君愛国」と表現される「愛国思想」である」⁹⁾と論じている。この「忠君愛国」の理論について坂口は「愛国思想には、「忠君」の思想と、「愛国」思想との分離があり、この時期の全体を通しての忠君愛国一体化の思想理論は存在しない」¹⁰⁾として、「忠君愛国一体の理論を国民大衆の間に一般化し、徹底するためには、忠孝一致の理論の上に立つ、家族主義的国家観の必要があった」¹¹⁾と忠孝一致の理論の上に立つ家族主義的国家観によって、「忠君愛国」思想が一体化したと論じている。

また、坂口は「忠君愛国」が一体化する前と後でその思想に大きな変化があったという。この一

体化する以前は、「君＝天皇に対する忠を求めつつも、そこでは、なお個人の存在は認められていた」¹²⁾と論じている。一方の「忠君愛国」の理論が一体化した後は、「親への孝は、国父たる天皇への忠へと連動してゆき、国の為、陛下のために身を鴻毛の軽ろしとする精神、行動は最大の孝行、家の名誉、郷土の名誉と称賛され、さらに、昭和期に入ると、従来の忠君愛国とならんで、「滅私奉公」と言う思想が国民全体に強制されてくる」¹³⁾と、「忠君愛国」の理論が統一化されたことにより個人の尊厳は徐々に認められなくなり、その上で「滅私奉公」の理論が国民全体を覆うようになってきて公に尽くす愛国心となった。この「滅私奉公」の精神を国家の政策として坂口は「戦争目的完遂という名の下で法文化され制度化され実施されたのが、昭和期の「国民精神総動員」「軍需工業動員法」「国家総動員法」等の一連の動き」¹⁴⁾と論じている。このように昭和期に入り、「忠君愛国」の理論から個人の尊厳を失い「滅私奉公」の理論が国家の政策となって行くようになっていった。

これらを統括すると、「尊王愛国」の理論の時期は、共通した愛国心が国民の間で浸透せず、教育勅語を發布して教育界において愛国心を育成、強化していく方針を打ち出した時期と言える。次の「忠君愛国」の理論は、教育界での教育勅語をはじめとして、国家による愛国心教育の育成と強化を推し進め、個人の尊厳は認められつつも、徐々に失われていった時期であった。最後の「滅私奉公」の理論では、昭和期の「国民精神総動員」を代表とする国家政策により個人の尊厳は失われ、公に尽くすような時期である。このように、国家による愛国心の強化を徐々に拡大していった系譜が先行研究によって明らかになっている。

2、石川三四郎への着目

本節では、石川の生涯を概観し、坂口の示した愛国心の系譜上にどのように位置づけられるか論じていく。

石川は1876(明治9)年に、埼玉県児玉郡山王堂村(現在の埼玉県本庄市)で生まれた。1882(明治15)年の春、石川は6歳で本庄小学校(現在の詳細は不明)に入学し、1890(明治23)年に本庄小学校高等科を卒業したが、1884(明治17)年に「本庄町に創設された児玉郡立児玉中学校は、地方の財政難から経営維持が困難となり」¹⁵⁾、石川の進学先となる中学校は廃校となってしまった。1890(明治23)年、石川が14歳の時に同郷の自由党員である茂木虎次郎(後の佐藤虎次郎、1864-1928)と橋本義三(後の粕谷義三、生没年不明)が共同生活をしていた家の玄關番をしながら、福音教会で英語を勉強した。下宿先には、自由党員の中島信行(1846-1899)らをはじめ多くの党員が集まって討論をしており、石川は次第に社会問題、政治運動¹⁶⁾といったものに関心を持つようになった。

石川は1895(明治28)年に東京から帰郷し、その翌年の1896(明治29)年から1897(明治30)年の1年半という期間で群馬県室田村の室田高等小学校¹⁷⁾の代用教員を務めることになった。代用教員を辞めた石川は、本郷教会の海老名弾正(1856-1937)からキリスト教の洗礼を受け、黒岩涙香¹⁸⁾(1862-1920)が社主を務めていた新聞社である朝報社に入り、黒岩の命令により秘書となる。また、同社にて結成された社会改革を目的とする理想団に参画し、内村鑑三(1861-1930)に出会い、さらには、社外から参加していた安部磯雄(1865-1949)、木下尚江(1869-1937)らを知ることとなった。

石川はキリスト教を取り入れたことについて『自叙伝』では、「十五、六歳の時から社会主義や無政府主義のことを教えられ、学生時代から新聞や雑誌に『ソーシャリズム』を主張した文章を寄せたりしていました。しかし、本当に人類社会への献身と言うことを教えられ、全我をそれに傾倒しようとする情熱を養われたのは全くキリスト教によってでした。海老名弾正氏の『新武士道』という説教などにはどの位感激せしめられたことでしょうか¹⁹⁾と述べている。

この『新武士道』とは、武士の精神とキリスト教の博愛の精神を備えたものであり、石川はこれに感激している。特に、石川が感激したのは、世界的同情についてである。この世界的同情という博愛の精神が、この先の石川に大きな影響を与えた。例えば、石川の「人道主義」という論文では「人の幸福は人類互に相愛するより大なるは無し、平和は此愛より来り、進歩は此愛より来る。蓋し愛は是れ万善の本源たる可きなり。〔中略〕此愛を以て夫婦相愛し、朋友相愛し、兄弟姉妹相愛し、四海万人相愛す、博愛は即ち是れ人道の本義たり。〔中略〕然り人道は天地の衷情より発源し、人道主義は之を実現拡充せんと欲するなり²⁰⁾と述べている。このように、石川は愛というものをキリスト教の博愛の精神と結びつけることで、全人類への献身というものを思想に取り入れていったといえる。

キリスト教と社会主義の思想を取り入れて理想団で活動していた石川だが、1903(明治36)年11月、日露戦争の開戦の気運が高まるなか、朝報社を辞めることとなった。社主黒岩との日露戦争についての見解の相違から朝報社を辞した幸徳秋水(1871-1911)、堺利彦(1871-1933)らが、非戦論を掲げて平民社を設立した。その両者の誘いもあって石川は同社に入社することになる。ところが、1905(明治38)年、週刊『平民新聞』は石川が紙面上に発表した「小学教師に告ぐ」という記事によって廃刊に追い込まれることになった。

その後、平民社は社会運動の場を『直言』に移したが、それ以降も社会主義運動の取り締まりが厳しくなり解散に追い込まれた。平民社が解散した後石川は、『新紀元』、『世界婦人』、日刊『平民新聞』と活動の場を次々と移していった。しかし、1907(明治40)年4月に日刊『平民新聞』は山口孤剣(1883-1920)の執筆した「父母を蹴れ」が朝憲案乱罪に問われ、結果的に廃刊となった。この事件により、石川は発行兼編集人という立場の責任を問われ、軽禁固6ヶ月を言い渡された。また、石川は日刊『平民新聞』の廃刊と同年の2月に行われた社会党第二回大会の控訴裁判²¹⁾により、7ヶ月の軽禁固が追加され計1年以上の獄中生活を送ることとなった。

入獄中の石川は、学習計画を立て読書と勉強に明け暮れる日々を過ごした。社会主義関連の読書内容としては、ジョン・レーの『現代社会主義』やマルクスの『資本論』、クロポトキンの『パンの略奪』そして、エドワード・カーペンター(Carpenter Edward, 1844-1929)の『文明、その原因と救済』と『英国の理想』などである。ここで、石川は本格的に西洋の著作を読み、カーペンターとは文通をするほどであった。その後、1910(明治43)年の大逆事件以降に社会主義者への弾圧が一層激しくなり、石川に対する監視も強まっていた。1913(大正2)年に石川は西洋に亡命することになる。

亡命をした石川は、フランスやイギリスで活動をしていたが、その活動中に第一次世界大戦を経験することになる。1914(大正3)年7月30日にベルギーのブリュッセルで万国社会党本部の主催による非戦大会が開かれた。この非戦大会で石川は、フランス社会党の代表ジャン・ジョレスなどの演説を聴取していた。石川はジョレスの演説に感激し、「この(愛国という)感動を捨てんがためではなく、ただ理性と感動との力を平均ならしめ、而して戦争を排斥せんがためである²²⁾として、

愛国心と理性によって戦争を排斥する考えを示した。その後、ドイツ軍のベルギー進行もあって、石川は7ヶ月ほどドイツ軍占領下のブリュッセルで籠城することになった。1915(大正4)年1月に、石川はロンドンに逃げこむことができ、そこでカーペンターと会うことができた。カーペンターとの関りは主に、デモクラシー論についてであり、それが後に石川が世に示すことになった「土民生活」思想である。

1920(大正9)年に石川は帰国し、農民自治会の機関誌『自治農民』への寄稿に精力的に行うことにした。当時の石川の主張は「土民生活」思想が中心となり、彼のデモクラシー論を発表していた。その後、石川は1927(昭和2)年に東京都千歳村で晴耕雨読の生活実践の場で「共学社」と名付け、「土民生活」思想に基づき活動を開始した。また、「共学社」の出版物として『ディナミック』を発行することとなった。『ディナミック』誌は1931(昭和6)年に満州事変が勃発すると同時に幾度か出版禁止となった。また、1933(昭和8)年に石川は中国に渡航し、東洋古代史の研究を始めると同時に『ディナミック』の発行は幕を閉じた。これ以降、石川は東洋史研究に没頭することになり、この期間に日本の敗戦を迎えることとなった。石川は満州事変から第二次世界大戦終結まで、戦争反対の立場を示していた。

「尊王愛国」の理論の時期の石川は、1890(明治23)年に教育勅語が發布される年と同時に学校教育を終えることになり、国家主義の方針を決めた教育を色濃く受ける事はなかった。その一方で、石川は自由党员との討論から海外の社会問題や政治運動に関心を持ち、また福音教会で英語の勉強をするなど、この頃から海外への視野が既に出来上がっていたことが特徴である。

日露戦争以後の石川の活動は主に記者として執筆活動や言論活動となり、その中心は社会主義に関連することである。その一連の活動の中には、彼の愛国心について書かれた論考や記事もあり、その内容には社会主義やキリスト教が見受けられる。その特徴としては、世界的な視野が全人類への献身に結びつき、それが愛国心への論考にも反映されることとなった。石川が主張する愛国心は、「忠君愛国」の理論が徐々に広まっていく中で、一国のなかで留まらない点に大きな特徴があるといえるだろう。

最後に「忠君愛国」の理論が統一し「滅私奉公」の理論に向っていく時期の石川は、西洋にわたり、第一次世界大戦を経験しその中で愛国心と理性というもので戦争を排斥していく考えを示した。つまり、個人の尊厳を排斥する「滅私奉公」とは相いれない理性に目を付けたのが石川の特徴と言えるだろう。

3、石川三四郎の愛国心に関する論考の検討

本節では、愛国心について執筆された石川の論考を用いて、坂口が明らかにした愛国心の系譜における位置づけを検討していく。そのため、まず二つの時期に焦点を当ててまとめていく。一つ目は、「忠君」と「愛国」それぞれが統一し「忠君愛国」の理論に向っていった日露戦争期である。二つ目は、「忠君愛国」の理論が「滅私奉公」の理論に移り変わっていく満州事変の時期である。それぞれの時期の石川の愛国心についての理論を検討し位置づけていきたい。その際、資料として『石川三四郎著作集』を扱い、その中でも、石川の平和論の集大成として出版した『わが非戦論史』²³⁾に収録さ

れた論考を中心的に用いていく。

一つ目の「忠君」と「愛国」が「忠君愛国」の理論の統一に向かった時期において石川が愛国心を中心的に扱ったものとして「愛国心と他愛国心」が挙げられる。この論考は、もともと週刊『平民新聞』第31号1904(明治37)年6月12日に発表されたものである。この論考で石川は愛国心について「我は日本国を愛す、日本国を愛するが故に同じく他国をも愛す、他国を愛するが故に自国を愛せずと言ふ可らず、我に愛国心あり、故に深く世の所謂敵愾心でふものを憎む、蓋し国家を過まり、国民を蠱惑する之れより甚だしきもの無ければ也」²⁴⁾と論じている。石川は愛国心について、自国と他国の両方を愛するものとして、それ故に他国を倒そうとする精神や国家が誤り国民の心を乱すものを憎むべきものと論じている。この敵愾心については、前週に発刊された週刊『平民新聞』の記事における「仁愛と国家」²⁵⁾において「敵愾心に理性の中心を奪われたる現時の日本人」と日本人の理性を奪っているものと表現している。このことから、当時の日本人の愛国心について他国との敵対する関係で強化していることを石川は批判している。

石川にとって愛国心とは「愛自国心と愛他国心とは衝突するべきに非ず、寧ろ愛自国心ある者は必ず愛他国心ある可き也」²⁶⁾と論じている。その内容は自国への愛国心は他国と衝突するものではないとして、対外関係において強化されていった「忠君愛国」の理論とは対になっている。石川の愛国心の特徴は「忠君愛国」の理論とは異なり、愛国に求めるものは忠君ではなく、愛によって自国と他国をも愛し世界に視点を置いていた点にあると言えるだろう。

次に、日本の愛国心が「忠君愛国」から「滅私奉公」へと向かっていく時期において、石川が愛国心を中心的に扱った論考としては「如何に祖国を愛すべきか」が挙げられる。この論考は、『ディナミック』第4巻第27号、1932(昭和7)年1月1日に発表されたものである。石川は当時の民衆の愛国心に基づく行動を次のように記している²⁷⁾。

闘争に携はる人々は国家百年の長計といふやうな責任感よりは、寧ろ功名手柄の野心のために動かされる。今日の国家組織に於ては、個人の行動と国家の利害と直接明白に關聯しないからである。従てこれを声援する後分の国民も、それを自己の野心に利用しようとする。新聞記者は脳漿を搾つて扇動的文字を連ねて誇張の報道を掲げる。学校営業者はわれ先きにと男女青年を街頭におびき出して所謂愛国心のデモンストレーションを行ふ。小学校の東西わきまへない児童にまで指を切つて血判させて国軍の勝利を誓願させる。それが愛国心の発露として喜ばれる

石川は闘争に携わる人々は、野心のために動かされており、国民もその野心を利用しようとして行動するようになると分析している。石川はその例として、新聞記者は扇動的な誇張の報道をして、学校営業者は児童生徒を街頭にだし愛国心のデモンストレーション行ったり、血判して国軍の勝利を誓願させ、愛国心の発露として喜ばせたりしていると記している。石川は当時の国民が野心という名の愛国心に利用され扇動されていることを指摘している。その野心によって成り立つ愛国心について、石川は「戦争と軍隊以外のことに愛国心を放散することは愛国心の経済にならない。けちな、みすばらしい農民の問題などは、ほつといて、景気のよい方へ向かつて万歳！ 万歳！ と叫ぶのが「やまと魂の愛国心」であり、武士道の神髄である。愛国心は安売りするが、同情や同胞愛には至つて吝んぼなのがやまと民族の特徴だ」²⁸⁾と論じている。このことから、当時の国民の愛国心

が戦争や軍隊といったものに向けられ、同情や同胞愛などといった人間の感情といったものに目が向けられなくなり、愛国心が戦争を抑止するものではなくなっている点を指摘している。

また、愛国心の系譜にて「滅私奉公」の理論では個人の尊厳は失われている点が指摘されていたが、その点について石川は「紛失した個人主義」にて「今日の日本には忘れられてゐる。それは実に個人主義、自主精神の問題」²⁹⁾と問題視して、その問題点を次のように論じている³⁰⁾。

個人主義の完成せられない国には健全なる国家主義も、愛国心も、忠誠、友愛の精神も発達しようがない。道德は個人の問題である。道德の責任は個人の自由があつて初めて起る問題である。奴隷は肉体的に服従はするが、精神的に責任を持たない

石川によると、個人主義の完成しない国では愛国心や友愛の精神が発達しようがないとして、個人主義の必要性を説いている。また、道德の責任は個人の自由があつて初めて起る問題として、精神的に責任を持たないのは奴隷であると石川は論じている。このように、「滅私奉公」の理論における個人尊厳を認めない時代の愛国心は、野心的で道德の責任を持たない奴隷のようなものであると石川は論じている。一方で、石川は個人の自由を認め、健全なる愛国心を発達させるには個人の責任を持たせる道德が必要であると論じている点に当時の特徴がみられる。

おわりに

本稿では、石川の道德観として愛国心に焦点をあてて論じてきた。石川は、当時の国民性を押さえ、その上で愛国心の問題点を指摘している。石川の愛国心の特徴として、日露戦争期から世界的な視野を持って他国との衝突によって愛国心を強化するものではないとしていた点、もう一つは国家が愛国心を扇動し野心を駆り立てるのではなく、個人の自由を認め道德の責任を負わせ、そこで愛国心や友愛の精神を発達させることを示した点が特徴と言えるだろう。これらの特徴から見ても石川は愛国心によって非戦論を意識していたと言えるだろう。

ただ、石川は完全なる非戦論者ではない点だけは押さえておかなければならない。それは、1916(大正5)年に即時停戦、講話締結を要求する運動が社会主義者のなかで盛り上がっていたが、それに賛同せず講話尚早の宣言を16人の社会主義者とともに表明することがあった。これについて鶴見俊輔は「石川の考え方が、いついかなる場合にも戦争に反対という絶対的非戦論の立場ではなかったことがわかる」³¹⁾と評している。日露戦争や第二次世界大戦で非戦論を主張する石川がこの宣言をするに至ったかについては、彼の愛国心をより明らかにする上では、今後の課題の一つと言えるだろう。

注

- 1) 大澤正道の「石川三四郎の平和主義」(家永三郎編『横田喜三郎 石川三四郎 無産政党・労働者の反戦運動資料』日本平和論大系11、日本図書センター、1994年、所収)で石川の平和主義について論じられている。

- 2) 同上、408頁。
- 3) ここで紹介されている石川の論考は「墨子非戦論」、「満州事変」、「如何に祖国を愛すべきか」の三つである。
- 4) 前掲、大澤正道「石川三四郎の平和主義」、411頁。
- 5) 藤原修「近代日本における平和主義と愛国心 -- 幸徳秋水と福沢諭吉」『現代法学』第15巻、2008年、12頁。
- 6) 坂口茂「近代日本の愛国思想教育」(上巻)、株式会社ストーク、1999年、1頁。
- 7) 同上。
- 8) 同上。
- 9) 同上。
- 10) 同上。
- 11) 同上。
- 12) 同上書、2頁。
- 13) 同上。
- 14) 同上。
- 15) 北沢文武『学問と愛、そして反逆 石川三四郎の生涯と思想 上』鳩の森書房、1974年、24頁。
- 16) 石川は「私の精神史」において「そして幾人か集まると必ず『財産平均論』が討ひらわされた。それは今日の社会主義論である。シカゴ・無政府主義者の大運動を佐藤氏から聞かされたのも、この時であった」と振り返っており、当時から社会主義の運動や海外の活動にも関心を持つようになった。引用、石川三四郎「私の精神史」(石川三四郎『石川三四郎著作集』第4巻、青土社、1978年、所収)、284頁。
- 17) 現在の詳細は不明。室田村は1905(明治38)年に室田町となり、1955(昭和30)年に群馬郡室田町と碓氷郡見村が合併し、群馬郡榛名町になった。その後、2006(平成18)年に現在の群馬県高崎市に編入した。
- 18) 本名は黒岩周六である。
- 19) 石川三四郎『自叙伝』(石川三四郎『石川三四郎著作集』第8巻、青土社、1977年、所収)、49頁。
- 20) 石川三四郎「人道主義」(石川三四郎『石川三四郎著作集』第1巻、青土社、1978年、所収)、20-21頁。〔中略〕は筆者によるもの。
- 21) 石川が罪に問われていたのは、社会党第二回大会の様様を日刊『平民新聞』第28号(2月19日)に発表したことによる、社会の秩序を乱すものと断定されたためである。
- 22) 前掲、石川三四郎『自叙伝』、339頁。括弧内は筆者による追記。
- 23) 石川三四郎『わが非戦論史』ソール社、1956年
- 24) 石川三四郎「愛国心と他愛国心」(石川三四郎『石川三四郎著作集』第1巻、青土社、1978年、所収)、178頁。
- 25) 「仁愛と国家」は、週刊『平民新聞』第30号、1904(明治37)年6月5日に石川が寄稿したものである。この論考も『わが非戦論史』に収録されている。
- 26) 前掲、石川三四郎「愛国心と愛他国心」、179頁。
- 27) 石川三四郎「如何に祖国を愛すべきか」(石川三四郎『石川三四郎著作集』第3巻、青土社、1978年、所収)、345-346頁。
- 28) 同上書、346頁。
- 29) 石川三四郎「紛失された個人主義」(石川三四郎『石川三四郎著作集』第3巻、青土社、1978年、所収)、421頁。
- 30) 同上書、416頁。
- 31) 鶴見俊輔「解説」(鶴見俊輔編、『石川三四郎集』近代日本思想体系16、筑摩書房、1976年、所収)、468頁。

参考文献・引用文献

- 石川三四郎「愛国心と他愛国心」(石川三四郎『石川三四郎著作集』第1巻、青土社、1978年、所収)
 石川三四郎「人道主義」(石川三四郎『石川三四郎著作集』第1巻、青土社、1978年、所収)
 石川三四郎「如何に祖国を愛すべきか」(石川三四郎『石川三四郎著作集』第3巻、青土社、1978年、所収)
 石川三四郎「紛失された個人主義」(石川三四郎『石川三四郎著作集』第3巻、青土社、1978年、所収)
 石川三四郎「私の精神史」(石川三四郎『石川三四郎著作集』第4巻、青土社、1978年、所収)
 石川三四郎『自叙伝』(石川三四郎『石川三四郎著作集』第8巻、青土社、1977年、所収)

石川三四郎『わが非戦論史』ソオル社、1956年

貞清裕介「「小学教師に告ぐ」から見る石川三四郎の小学校教師観」『総合社会科学研究』第3巻第10号、2018年、21-31頁

藤原修「近代日本における平和主義と愛国心—幸徳秋水と福沢諭吉」『現代法学』第15巻、2008年、3-25頁

坂口茂『近代日本の愛国思想教育』(上巻)、株式会社ストーク、1999年

家永三郎編『横田喜三郎 石川三四郎 無産政党・労働者の反戦運動資料』日本平和論大系11、日本図書センター、1994年

大澤正道「石川三四郎の平和主義」(家永三郎編『横田喜三郎 石川三四郎 無産政党・労働者の反戦運動資料』日本平和論大系11、日本図書センター、1994年、所収)

鶴見俊輔「解説」(鶴見俊輔編、『石川三四郎集』近代日本思想体系16、筑摩書房、1976年、所収)

北沢文武『学問と愛、そして反逆 石川三四郎の生涯と思想 上』鳩の森書房、1974年